子どもたちの「笑顔」と「夢」があふれる学校

たいさんぼく

平成 29 年度 学校だより１０月号
小平市立小平第十三小学校
http://www.kodaira.ed.jp/13kodaira/

子どもにとって　力になる言葉

教務主幹　菊池　佑介

小平十三小の特色ある行事「芝生の上での裸足の運動会」も当日を迎えるばかりとなりました。子どもたちの健康管理や衣装づくり等に、ご理解、ご協力いただいた保護者の皆様、大音量での校庭練習にご理解いただいた地域住民の皆様に感謝申し上げます。

今年は、夏休み中に雨が降ることが多く、思うように芝刈りができない日が続きました。八月中旬、芝刈りが何日もできない日が続き、小雨の後に決行した日は、作業時間が最長の３時間半、刈った芝が記録になるであろう７４袋も出ました。その後の天候は、台風や大気が不安定な状況や、日照時間も少なかったことから、芝生の生育状況が思わしくない状況でした。そんな大変な中においても、臨機応変に対応していただいたボランティアの皆様にも感謝申し上げます。

さて、運動会では勝敗がつきものです。徒競争やリレー、団体競技など、様々な勝敗のドラマがその中にはあります。ふだん、体育が苦手な子どもたちにとっても、赤が勝つか、白が勝つかはとても気になることでしょう。私の前任校では赤が５連覇中で、「６年間ずっと優勝できないかもしれない」と嘆いている子どももいました。

プロ野球の野村元監督の話した言葉の中で、とても印象的な言葉があります。「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という言葉です。実はこの言葉は監督のオリジナルではなく、江戸時代、今の長崎県平戸の大名で、文人、武人でもある松浦静山の言葉だそうです。負ける時には負けにつながる必然的な要因があり、不思議な点はない。ただ、勝つときには、どうして勝ったかもわからない、不思議な勝ちがあるという言葉です。

また、私が好きなバスケットボールの漫画「スラムダンク」にとても好きなセリフがあります。『「負けたことがある」というのがいつか大きな財産になる』という言葉です。インターハイを連覇し王者と言われ続けている山王工業高校が２回戦で湘北高校に負けたときに、監督が選手たちにかけた言葉です。常に勝ち続けているチームは、なかなか自分たちの課題が見えにくくなるものです。負けたときにこそ、「挑戦者」としての気持ちに立ち返り、努力にさらに磨きをかけていくということを価値付けた言葉だと思います。

名将と呼ばれる指導者には、育成する選手たちが勝敗と向き合うときにかけるすてきな言葉をもつ人が多くいます。今、私はこうした名言を読み返すと、とても胸が熱くなるのを覚えます。

運動会当日、もし、勝つことができたら、子どもたちには十分喜びを味わってほしいと思います。

そして、負けてしまった子どもたちは、悲しんだり、落ち込んだりするでしょう。そのタイミングこそ、一番子どもたちが成長するチャンスと捉えています。がんばっていた過程は見えにくいものですが、「諦めずに最後までやりぬいたこと。」「失敗した友達を責めずに優しく言葉をかけてあげたこと。」「転んでも泣かずにがんばれたこと。」など努力した様子をぜひほめてあげてください。また、どうやったら成功するか、どこに気をつければ失敗をせずにすむのかを、その子どもの様子に合わせて優しくアドバイスすることも併せてお願いします。当日も温かいご声援をよろしくお願いします。

○１０月の芝刈りの予定　　※午後３時３０分より
　１０月２７日（金）、３０日（月）
　芝生養生期間に入るため、芝刈りのない期間が続きます。